

第38回大日本耳鼻咽喉科會中國地方會記事

期 日 昭 和 13 年 3 月 6 日

場 所 岡 山 醫 科 大 學 第 1 講 堂

幹 事 高 原 滋 夫 記

1. 急性閉塞性副鼻竇炎の1例

谷 豊(岡山醫大)

昭和12年8月12日初診。患者は60歳の男。半箇月前より左側混血性鼻汁過多、同側の鼻閉塞、流涙、左顔面の電撃様疼痛を訴へ、時々38乃至39度の發熱あり。初診時所見は左側顔面鼻根部に軽度の腫脹疼痛あり。左側鼻腔は側壁が内方に壓迫されて狭小となり多量の混血性膿性の悪臭ある鼻汁あり。下、中甲介は肉芽様に増殖肥大し觸れると疼痛著明にして容易に出血す。右鼻は全く正常。以上により本症は癌腫と考へたるも、2回に互る試験切片に癌腫の所見無く炎症性なり。初診後3日目に、悪寒戰慄敗血症様發熱あり。左上顎竇試験穿刺により1部は乾酪様に變性したる濃厚膿汁を得たるも自然孔の閉塞ある爲か洗滌液は抵抗ありて出でず。よりて演者は本症を炎症性と考へ、犬齒窩より開きたるに内部は「ポリープ」乾酪性物質及膿汁を満し且篩骨蜂窩にも連続せるを知り、之を除去せるに日ならずして容易に全治せり。猶其時取りたる「ポリープ」に癌腫の所見を認めず。要するに本症は上顎竇に急性副鼻竇炎があり、其開口部が閉塞し、爲に一見癌腫を想はず重篤なる症状を呈したるものと考へる。

追加 田 中 文 男

鼻腔癌腫の經過中副鼻腔殊に上顎篩骨蜂窩の急性炎症を合併する事ありて、演者の症例とは反對に、それを副鼻腔炎と診断し、手術を行ひ初めて鼻腔癌腫の存在するを知ることも亦尠からず。

演者の症例に於ても最後迄癌腫の疑を捨てず治療したるものにして、手術時の所見竝摘出せる組織の所見に於て癌腫を疑ふ根據を得ざりしのみならず、手術後急速に諸症状の消退を得て、茲に初めて癌腫を除外するに至りたるものなり。

2. 主として硬口蓋に發育せる囊腫様腫瘍の1例

藤 田 半 三 郎(岡山日赤)

患者、安原某、16歳の女子。現病歴は約1年前より口蓋の略々中央部に膨隆を生じ、漸次其度を増し、更に最近に至りては上唇珠に人中中部が前方に膨隆し來り、昭和12年11月來院したるものなり。局所所見は口蓋正中線に沿ひ硬口蓋後端より前方門歯部齒齦に至る約鶯卵大の腫脹あり。其中央部にては硬口蓋骨を缺損し試験的穿刺により帯黄褐色の液を得、檢鏡し「コレステリン」結晶及脂肪球を認めたり。鼻腔底は前方に於て上方に膨隆し、爲に鼻中隔は強く右方に彎曲せり。而して口腔より此腫瘍を摘出せるに、囊腫は硬口蓋骨を上下2枚の骨板に分ち、其間に發育せるを認め、囊腫壁の組織學的檢査により囊腫内壁は一般に毳毛圓柱上皮にて覆はれ、上皮下組織には腺組織或は炎症性所見を認めざりき。演者は本例を以て比較的稀なる囊腫なりとし、診断に當り最初困難を感じたるが、手術的竝に組織學的所見よりして、胎生期口蓋形成に當り迷入埋没したる鼻粘膜原基より發生したる囊腫と考ふるが最も妥當ならずやと述べたり

3. 血栓を有せざる耳性敗血症の1治

癒例 瀧口一雄(岡山醫大)

約2週間前より弛張熱を有する43歳の男子の右側慢性中耳化膿症に續發せる乳嘴突起炎に對し、シュワルツエの手術を行へり。手術當時、腦脊髄液は異常なく、又クエツケンステットの検査も異常なく、膿を露出して検査せるも其部に血栓を疑はしむるものなきに拘らず、術後尙弛張激しき高熱が續きたり。然るに患者は術後氣分甚だ輕快となり、手術創の経過は良好にして、腦脊髄液、尿の所見も總て正常を示し、弛張熱を説明するに足る原因たるもの他になく、遂にグイダール反應をも試みたるが之又陰性に終れり。再び靜脈膿球部迄露出し檢するに血栓は證明せずして、手術後12日間を熱源不明の儘経過せり。然るに術後13日目に至り、左上膊皮下に限局して發赤腫脹を生じ、漸次壓痛を加へるに至り、遂に之を切開せり。而して其際の膿汁の細菌検査を行ひしに、連鎖状球菌よりなり、更に發熱時に肘靜脈より培養せる菌が、何れも中耳化膿症の起炎菌と同一なる連鎖状球菌を示せるよりして、本腫脹は皮下の耳性轉移性炎症なることを知りたり。斯くして茲に始めて、本例は臨牀上は膿血栓を證明し得ざるも、確かに耳性敗血症なるを知りたり。演者は本例を以て、ハイマン、ブリューゲル等の認めて居るが如き徑路により、即ち起炎菌が恐らく罹患鼓室、又は乳嘴蜂窩内より直接に血流中に入り、斯かる弛張激しき熱型を示し、且又轉移としては比較的稀なりと思はるる皮下の轉移を來したるものと思惟すと述べ、尙同患者は體格強健、食慾旺盛にして、高熱を少しも意とせず、術後日々氣分の良好なりし爲、何等特別の注射や藥劑投與を用ふる事なく自然に任せ、其経過を充分に觀察し得、術後18日目より發熱とまり自然に治癒したる興味ある症例なりと述べたり。

追加 高原滋夫

本患者に於ては輸血、強心劑等は使用し居らざるも、之は全く患者の食慾旺盛にして、全身状態の至極佳良なりしによるところなり。斯くの如く何等全身的療法を行はずとも、全身の抵抗力強大ならば、原病菌の除去のみによりて、耳性敗血症の治癒することあり。本例は正しく其適例として大いに參考たるべし。

追加 山口治

輸血は敗血症の際屢々應用され効果を實するものなるは周知の所なるが、其際血液供給者に傳染性疾患の無きを充分確かむる必要ありとて、輸血によりて「チブス」の傳染したりと思はるる1例を紹介せり。

追加 田中文男

血栓を有せざる耳性敗血症は、我々の想像以上に多きものならん。本例は血液培養陽性にして轉移を來したる例なるが、斯かる所見を呈する事なく敗血症を來し、而も原病菌たる耳疾患の治癒に赴くと共に、敗血症も亦治癒するが如き症例は、從來考へられたるよりも多きものなりと考へ居れり。尙余の經驗によれば、血液培養は解熱時よりも發熱の極期に正中靜脈より採血せる血液を用ひる場合の方培養に成功すること多し。

次に本例に於ては、其熱源に就ての攻究中、最初グイダール反應の結果より、内科醫より「チブス」を疑はれたるものなるも、余は其経過よりして、敗血症の疑ひを放棄するを得ざるを主治醫たる瀧口君に注意し置きたるが、果して第2回目のグイダール反應は微弱となり、却つて血液培養が陽性を示し、且轉移性炎症を發現せるものにして、これ亦大いに注意を要す。即ち總て診斷上重要な因子が、多少疑ひを残す場合には更に、之に就て再三の検査を繰返すは臨牀上肝要事なり。

4. 套管拔去困難症に對する「インツバチオン」の效果に就て

藤 山 杏 平^(岡山醫大)

演者は2例の喉頭「ヂフテリー」後に於ける「カニューレ」拔去困難症に對し「ゴム」T字管其他の方法で成功せず、最後にオードワイエル氏喉頭挿管法に依り初めて確實に奏効し、患者及患家の衷心よりの感謝を受けたる経験を報告せり。患者は8歳及4歳の喉頭「ヂフテリー」の患者にして、氣管切開後54日及63日の後に喉頭挿管法を行ひ、何れも約20時間喉頭内に挿管を騷擾する事により停効を見たり。本法は、田中教授の既に度々提唱されたる如く、套管拔去困難症に對し、種々なる療法の奏効せざる時には是非一應本法を試むべきなりと述べ、既に再三田中教授の述べられたるが如く、當教室に於ては套管の拔去至難なるものに對しては最後に恒に本法によりて之が拔去に奏効し居れりと附加せり。

追加 田 中 文 男

套管拔去困難症に對する療法は種々あるも、要するに最も簡單にして早く治癒せしむるものを好しとす。余も種々の方法を試み居るも、夫等にて成功を見ざるものに於ては、最後にはこのオードワイエル氏挿管法を行ひ、必ず成功し居れり。本法は困難の如しと雖も、少しく習熟せば比較的容易にして、凡ゆる療法に窮したる場合には是非試みられん事を奨む。

5. 空氣銃による鼻腔盲管銃創の1例

山 田 武 夫^(東京中央病院)

患者は11歳の男子。友人の空氣銃誤射により鼻腔盲管銃創を受け、鼻出血に驚き來れるものなり。射入口は右の鼻翼に於て側鼻軟骨の鼻骨への移行部にして、彈は鼻入口より3cm奥にて、鋤

骨に留まれり。X線撮影により其部位を確めたる上之を取り出し得たり。

追加 高 原 滋 夫

曾て小學兒童が友人により顔前より空氣銃の發射を受け、彈は蝴蝶口蓋窩に遺留せるに遭遇し、最初上顎齶を開放し、其後膿を除去し進みたるが失敗し、最後に外方頬部より手術を進め、「レントゲン」寫眞數枚の補助の下に漸く之を摘出し、盲管銃彈摘出の想像以上に困難なるを経験したることあり。該患者は當時何等發熱、局所痛等を有せざりしものなりし爲、術後醫局同僚間に於て、斯かる困難を侵して迄之を摘出するの要なしとなす意見も出で、一應成程と思ひたることありて、今尙此點に就き疑ひをいだき居れり。

6. 稀有なる先天性軟口蓋畸形の1例

山 田 武 夫^(東京中央病院)

言語障礙を主訴とせる3歳の男子に、懸壜垂破裂を伴へる稀有なる軟口蓋畸形を見出せり。畸形は破裂せる懸壜の背後より1條の索狀の組織が垂下し、舌の有輪廓乳頭の前部に正中位に附着せるものなり。病歴及所見よりして本畸形は明かに梅毒、水腫、結核、癌腫等による後天性畸形と識別し得るものにして、恐らく口蓋形成期たる胎生期に於て、兩側上顎突起より攢がれる口蓋板が舌によつて擧上される際、左右何れかの口蓋板の過剰の組織が舌に附着し、互に其上皮が剝脱し癒着を見、其儘發育せるものと思考さる。言語障礙は手術的處置によつて治癒したり。

7. 我教室に於ける耳鼻咽喉科領域の異物統計

黒 川 孝 一^(岡山醫大)

藤 山 杏 平^(岡山醫大)

當中國地方の我科領域に於ける異物患者の模様

を知らんとし、演者等は田中臨牀を訪れたる過去10箇年間の異物患者に就て其原因的關係を統計的に調査せり。異物患者總數は我外來患者數の0.1%弱にして、其内譯は食道異物が8割弱を示し、次に外聽道異物、氣管枝異物、咽頭異物、喉頭異物、鼻腔異物、氣管異物の順なり。最も多數を占むる食道異物患者の年齢及性的關係を見るに、2, 3, 4歳に於て最も多く、凡そ學齡期以後に至りて次第に減少し、12歳頃に於ては殆どこれを見ず、14歳頃より次第に増加して4, 50歳に至れり。其性的關係に就ては幼年期に於ては男子に多く、高年者に於ては女子に多し。其異物の種類は、幼年期に於ては貨幣最も多く、全異物の47%を占め、内1錢銅貨が大部分にして、5錢、10錢白銅は2錢未滿の子供に於てすらも、無事食道を通過せるを知りたり。次に玩具の類で、殊に最近お菓子(グリコ、キャラメル)の景品として添へある所の「メタル」勳章類の異物患者を多數見受けるに至りし事は公衆衛生上注意すべきことならん。高年者に於ける異物は魚骨が大多數にして、全異物の24%を占め、次に養齒なるが、之は近年激減し居れり。以上食道異物を發來せしめた原因に想ひを馳するに、幼年期では齒の未發育の關係上咀嚼の出來ざること、親乃至側近者の不注意によること多きが如く、餘裕ある家庭に於ては之を見る事妙し。高年者に於ては食事の際急ぎたる爲、又料理法の不注意、魚の食べ方による事多く、其他職業上「ピン」等を口に啣へる習慣の者に之を見たる例もあり。只、本統計に於ては、流體異物即ち自殺の目的にて毒液を呑みたる者は1例のみにて種々病的原因による食道狹窄の異物患者、精神病者の異物、齒科其他口腔醫療の操作中器具の陥入せし者、麻酔の經過中に起りし者には遭遇せざりき。次に氣管及氣管枝異物に關し、主訴、介在位置、摘出法に關し臨牀上注意事項を述べ、且2箇以上の異物

が1例は食道に、1例は氣管枝に介在せる症例の經驗に就ても述べる所ありたり。

追加 田中文男

此統計中私の興味をひいた1つは、食道異物は小兒に於て男子に多きは當然なるも、大人に於ては反對に女子に多きことであつて、而も其異物は魚骨が多數であることである。此事實は日本に於ける女子の社會的地位を反映せる興味ある事實なりと信ず。即ち女子が家庭に於て食事に當りては、常に家族の魚の残り又は「アラ」を食ふからであらう。

質問 山口治

演者は合併症に就て特に興味ある事を發見されたるや。

答

特に變りたる事は見出し得ざりき。合併症に就ては更に調査し、後日發表する積りなり。

追加 田中文男

余は嘗て直達鏡にて喉頭癌患者の試験的切除を行ひし際、術後取出したる鉗子の先が脱落せるを發見し、大いに驚き、喉頭、氣管を探したるも見當らず、大變心配したるを想起す。幸ひ此際は鉗子の端が氣管鏡中に脚を擱けて引懸り居りて安心したるが、當時之に就てよく調べ見たるに、螺旋の部位が既に腐敗磨滅し居たる爲にして、これはどの器械を使用する際にも心得ふ可きことなるも、殊に食道又は氣管内に使用する器械に於ては尙特に術前必ず器械を充分に検査すべきを教へられたり。先日もある専門醫より食道異物摘出中、鉗子の先端が脚を擱けたる儘、食道中に介在し、摘出せんとしたる貨幣は既に胃中に落下したるも、鉗子の先端は堅く食道粘膜内に介在して除去し得

ず當科に紹介せられ、漸くにしてこれを摘出し得たる1例ありたり。而して本例は、鉗子先端が莖部に於て腐蝕し、ために此部より折損したるものなるを知れり。注意を要す。

追 加 山 口 治

余は貨幣を摘出する際は貨幣鉤を用ひ居るが、先日「グリコ」の「メタル」を呑みし患者に之を行ひし處、容易に奏効せず。良く調べ見るに、異物が同時に食したる飴にて食道壁に固着し居たるものなりき。それ以來余は斯かる際、飴と一緒に呑みしに非ずやと訊ねる事にし居れり。尙余は骨を附着せる獸肉の食道異物患者に遭遇し、肉は除去したるも、それに附着せる骨は食道壁に刺入し居り拔去し得ず、依つて外部より食道を露出し、之を摘出したるが、其際創面と食道との間に瘻孔を作り、容易に閉鎖治癒せざりしに、根氣よく交換を續けたるに2箇月にて治癒せしめ得たる經驗を有するを以て追加す。

8. 氣管竝に氣管枝異物の運命に就て

藏 本 養 三(岡山醫大)

氣管竝に氣管枝異物の運命を知らんとして家兎の氣管竝に氣管枝内に、經口的に種々なる異物を挿入し、其後30分、5時間、24時間、3日、5日、7日、……等一定の間隔を以て「レ線」的に氣管或は氣管枝内に於ける異物の移動状態を検したり。異物材料としては麥穗、小豆(之等異物には豫め「ピン」の小片を刺入し、以て「レ線」上の異物指標となす)、留針竝に半切留針及散彈を用ひ、之等各種異物を直達鏡下に氣管、氣管枝内に挿入せしに、術後より咳嗽運動起り、24時間以内に於ては麥穗5%、小豆67%、散彈83%、留針(半切留針をも含む)95%の自然に咳出さるるを見たり。其後の時間的經過に於て小豆は急に其排出率を減

ずるも、麥穗に於ては7日以後に至りて遽かに排出率を増加し、7—14日の間には69%に増進し、異物挿入後21日間に於て麥穗は全挿入異物数の71%を、小豆にては85%を排出せり。尙、麥穗に於ては甚しく長期管(90日以上)1側氣管枝内に介在し、然る後に排出せられしものありしは注意をひきし所なり。而して之等異物の排出は何れも喀出作用によるものなるが、此際喀出異物が又一方口腔内より再嚥下せられ、食道を経て胃中に達する事稀ならざるは興味のある所なり。尙、留針竝に半切留針は他異物と甚しく趣を異にし、喀出に際して喉頭部に刺入介在すること尠からず、而も喉頭部の留針は屢々周圍に穿通し、甚しきは頸部軟組織中を経て縦隔竇内に迄達することすらあり。斯くの如く實驗的に家兎の氣管竝に氣管枝内に挿入したる異物は、其種類によりて種々なる運命を辿ると雖も、其71—95%の高率に於て自然に之が喀出せらるるは最も著明なる實驗的事實なり。勿論家兎と人類とは特に其姿勢に於て顯著なる相違あるのみならず、解剖的にも亦多少の差異あるは考慮を要する所なるが、演者は之等實驗成績を以て従來文獻に見らるる臨牀的事實と種比較考察し、グロズ、ダーハム氏等の統計的事實(氏等の統計によれば氣管、氣管枝異物中30—32%は自然に喀出せり)を擧げ、人類に於ても氣管又は氣管枝異物は今日一般に考へらるるよりも尙遙かに多數自然に喀出せられ居るならんと述べたり。

9. 内耳炎の治療法に就て

福 武 豊 次(岡山醫大)

演者は過去5年間に岡山醫大耳鼻科教室に入院せる中耳性化膿性迷路炎患者15例、慢性中耳炎に續發せるもの8例、急性中耳炎に續發せるもの2例、乳嚢突起炎手術後に起れるもの5例、(但し直

接迷路外傷によるものは1例のみ)の療法並に治療成績に就き統計的觀察を試みたるに、15例中死亡5例(33.3%)、更に之を迷路に手術的操作を加ふる事なく保存的療法を行ひたるものと、迷路開放を行ひしものに分ち見るに、前者に於ては8例中死亡1例(12.5%)、後者に於ては7例中死亡4例(57.1%)なりき。尚、死亡せる5例を詳細に検討したるに2例は既に初診時化膿性腦膜炎を合併せしものなるも、他の3例は何れも乳突突起炎の手術後起りたる迷路炎より腦膜炎を續發せるものなり。以上より演者は、從來田中臨牀に於ては原則として急性中耳炎に續發せる化膿性迷路炎は腦膜炎の初發症状の無き限り、腦脊髄液を對照として保存的療法を行ふ方針なるが、此保存的療法により満足すべき成績を得たる事を指摘し、且演者の統計よりすれば乳突突起炎手術後に起りたる迷路炎は可成り多く15例中5例あり、而も1例のみ水平半規管を損傷したるものにして、他は總て術後1—3日の後に迷路炎症状を呈したるものなり。而して從來斯かる迷路炎は多くは漿液性にして豫後良好とされたるも、余の統計によれば5例中2例死亡にして、甚だ不良の成績を見たるものにして、此點は多少臨牀上注意すべきものならんと述べたり。

10. 慢性上顎竇炎手術後に發生せる骨髓炎の1例

小坂 昭 男(岡山醫大)

演者は前々回の當地方會に於て、22歳の女子の慢性上顎竇炎根治手術後20日目に圓らずも右側上顎骨骨髓炎を續發し、先づ頬部に骨膜下膿瘍を形成し、漸次之が鼻根部に擴大し、あらゆる療法にも拘らず、當時病勢の進行は止むる所を知らざる状態に達せるを報告し、斯かる副鼻腔炎根治手術後の骨膜炎は幸に極めて稀なりとは云へ其豫後

は恐るべきものにして、副鼻腔炎手術が斯かる重篤なる合併症を招來する事あるは臨牀家として注意を要する旨述べたり。以來該症例に對し引續きあらゆる療法を講ぜしにも拘らず、炎症は更に前額部に及びて骨髓炎を發來し、其状恰も土龍の穴を窟るに似て其止まる所を知らず、而も悲惨なる長き経過を辿りて、遂に昨年7月28日、上顎骨骨髓炎發生後84日目に腦症状を呈して、不幸死亡せり。依つて演者は其経過の概要を述べ、併せて本例に於ては其経過が亜急性なりし事及患者は妙齡の美人にして、其容貌を著しく損ずる點等を惋惜し、之に對し根本的手術を行ふを躊躇したるが、今本例の全経過を回顧するに、最初より根本的に罹患骨の切除を行ひたれば、或は萬一にも良結果を齎し得たるものに非ざるかと述べたり。

追加 田 中 文 男

本例の如きは余の初めて経験せる所にして、文獻によるも其豫後は甚だ悪しとされて居る。最初骨髓炎が上顎骨に限局せる際に、根本的に大手術を行はんかとも考へたるが、小坂君が述べし如く患者が結婚適齡期の妙齡の女性なりし爲、顔面に醜形を残す如き大手術の施行を躊躇し、遂に時期を失したるものにして、今全経過を顧み、最初より積極的に處置し居たれば、或は萬一にも救ひ得たらんかとも思ひ居れり。

11. 耳性竇血栓の際の内頸靜脉結紮の適應に就て

高 原 滋 夫(岡山醫大)

演者は既往滿15箇年間に岡山醫科大學耳鼻科教室にて治療したる耳性竇血栓61例に就て、之を滿15箇年中の前10年間(竇血栓32例)と其後の5年間(竇血栓29例)に分ちて、其療法としての内頸靜脉結紮の頻度並に効果に就て統計的に回顧觀察し、以て内頸靜脉結紮の適應に就きて述べた

り。即ち演者は最近5箇年間に於て從來よりも著しく結紮せる症例の増加し、而も治療成績の増進せるを認め、更に之等結紮例の増加せるは、特に横竇の血栓例に於て見らるる所なりと指摘し、尙最近5箇年間の治癒率を手術様式（耳手術のみか、血栓摘出のみか、内頸静脈結紮か）によりても分類観察し、之等統計的事實を根據として、内頸静脈結紮の適應に就て次の如く述べたり。總て竇血栓例中、我々の最も屢々遭遇するは横竇血栓にして、我々が乳突突起炎の手術時、横竇に血栓を見たる場合、果して其血栓が横竇のみに局限せるや如何、將又血栓の心臓部が器質化せるや如何等に就きては實際問題として明瞭を缺く場合屢々にして、之を如何に處置するやに關しては大いに判斷に苦しむ所なるが、演者は手術時横竇に血栓を認めたる場合、1. 血栓が既に器質化せしか、又は器質化傾向の確實と認められ、而も微熱又は無熱の場合は竇手術及内頸静脈結紮を行はず。2. 血栓の未だ充分器質化せずとも、微熱の場合には、先づ單に竇手術に止め、其後の経過を觀察し、術後弛張熱を來せる際に於てのみ結紮を行ふ。3. 横竇に血栓ありて、未だその充分器質化せりとの自信なく、而も數日來定型的弛張熱の存する際は、先づ内頸静脈を結紮し、然る後血栓の摘出を計るの方針をとりたしと述べたり。

追加 田 中 文 男

内頸静脈結紮法は、竇血栓による全身感染に對する防禦の目的に於て、必ずしも絶對的のものに非ざるも、只今演者の統計的觀察の表によりても見らるる如く、症例を選べば偉効を來すこと多きは議論の餘地無き所なり。併し内頸静脈の結紮は、多少經驗を要し、且面倒なる爲、既に乳突突起炎手術に時と力を費やしたるのち、更に之が施行は億劫となり勝ちにして、稍ともすれば之が決行を

躊躇し、遂に治療の機を逸する事も屢々經驗する所なり。されば余は演者の如き一步進めたる適應の下に、積極的に之が結紮を敢行せらるるならば、竇血栓の治癒率は一段と向上するものと信ず。

12. 口腔底蜂窩織炎の2治験例

岡 貞 邦^(西 書)
(横 濱 病 院)

口腔底蜂窩織炎、即ちルードウィツヒ氏安魏那が屢々急速に病勢悪化して不幸の轉歸を取るは周知の事實なり。而して之が療法としては可及的早期に充分なる切開を加へ、以て排膿並に緊張の除去を計るが第一なるは勿論なり。此切開の實施法に就て、演者は第28回本地方會例會に於て、本症の1治験例を述べ、重症の場合には外頸部より頤下部、頤下部に舌筋を前後に切斷する深き横切開を加ふる必要有る事を強調せるが、最近演者が經驗せる2症例も亦之を裏書きするものと信ず。

第1例は34歳の男子。扁桃腺炎に併發せる左側頤下淋巴腺炎より口腔底蜂窩織炎を起したり。症狀比較的輕度なりし爲、左側頤下部に縦に切開を加へたるに可成多量の排膿あり、其後漸次快方に向ひ居たるに、手術後8日目より再び嚙下痛、開口困難及舌の強き壓痛を來し、口腔底左側後端膨隆し來り、此處に切開を加ふる事に依りて舌筋深部より多量の排膿を見、治癒せり。之は最初の切開が不充分なりしものと考へらるるなり。第2例は71歳の農夫。左側「ムコーズ」乳突突起炎に對し中耳根治手術を施し経過順調なりしに、術後17日目の朝、突然左側頤下部に壓痛を訴へ此部に輕度の腫脹現はれたり。其時刻には腫脹は早くも頤下部より反對側頤下部に及び、口腔底も浮腫狀に腫脹し、翌朝は腫脹更に強し。本人手術を納得したるを以て切開を行はんと準備中、意識の濁濁を來せり。既に絶望ならんと考へたるも、頤下部、頤下部に廣き且深き横切開を加へたる處、深部よ

り漿液性の膿汁少量出でたり。然るに翌早朝に至り意識恢復し、腫脹も減退し始め、急速に治癒に向ひたり。

追加 小田 醇 太 郎

余は前同地方會に於て齒性口腔底蜂窩織炎の1例に就て報告せるが、最近又1例の同様な症例に遭遇したるを以て追加す。患者は8歳の男兒。發病數日前より左側下顎大臼齒の カリエス に癩痛を生じ、發熱と共に急速に頰下部及び兩側頰下部より口腔底に互り板狀腫脹を見るに至りたるものにして、之に對し、直ちに前同報告せる症例同様、外部より下顎隅角部の右より左に及ぶ廣き切開を加へ、更に進んで口腔底に入り、病體の充分なる解放を計ると同時に、水分補給、輸血等を試み、幸に之を救ひ得たり。之等2例の経験より、余は本症に遭遇せし場合、躊躇することなく可及的廣く外部より切開し、殊に横位に切開するの必要なるを感じたり。

追加 田 中 文 男

扁桃腺摘出後 ルーデヴィチ氏「アンギナ」 を來し3日に死亡したる例を経験せしことあり。該例に於ける傳染徑路は、恐らく扁桃腺摘出前の局所麻酔に當り、誤つて注射針は扁桃腺の腺窩を通過して扁桃腺後部に達し、此際針端に腺窩内の病原菌を附け、之を注射液と共に深部に送り込みし事に原因する如く思はるるを以て、扁桃腺摘出前の注射には細心の注意を要す。

尙、ルーデヴィチ氏「アンギナ」 に對し加ふる皮膚切開は横走に大なるを可とし、更に顎舌骨筋、頰舌骨筋をも切斷するを良しとすと述べたり。

13. 小學校内に於て實施せる鼻疾患兒童に對する鼻洗滌療法と其成績

西村伊勢松(岡山日赤)
奥島芳夫(岡山日赤)

演者等は從來學童の耳鼻咽喉科疾患の治療に關し興味を有したるが、偶々縣下邑久小學校に於て蕃膿様症狀を有する兒童29名に對して、校長初め擔當教諭方々の熱心なる努力の下に1箇年間學校内に於て鼻洗滌を繼續實行するの機會を得たるにより、其結果に就て報告せり。注意すべき點として、1. 鼻洗滌の實施は演者等の豫想に反し、患兒の多數のものに寧ろ歡迎されたる事。2. 蕃膿様症狀の輕快又は全治せるもの實施者中8割以上に達せる事。3. 輕快又は全治せるもの内大多數のものは學業成績に向上を認め得たり。然れども之等の成績は實施校未だ僅に1校にして患兒の數亦少數なるが故に、將來更に經驗を重ねたる上報告する所あらんと述べたり。

追加 田 中 文 男

余は曾て岡山縣の依頼を受け、縣下の専門醫なき地方に於ける罹患兒童を巡回治療したることありて、其際専門醫無き爲、又は貧困なる爲専門醫の治療を受ける事の能はざるものに對して、診斷を告ぐる事が却つて患兒並に兩親の精神的不安を増すのみなるを経験し居れり。然るに演者は其點に留意せられて學校にて實行し得る範圍内の簡單なる療法を教師に教示され、之を實行に移されて斯かる良好なる成績を得られたるは學校衛生上注意すべきことなり。

14. 咽頭及喉頭結核の自然治癒

山 口 治(會 歌
中央病院)

演者は最近経験せる咽頭及喉頭結核の自然治癒例を報告し、更に病勢の程度及豫後判定に對し、現今行はれつつある試験方法に併せて局所血液像の検査を行ふを推賞せり。即ち其方法は「ツベルクリン」を以て ビルケ氏反應 を行ひ、其丘疹の表面に輕く切傷を加へ、自然に流出する血液と耳朵より得たる血液の働とを比較するものにして、然る

場合病勢の進むに従ひ局所血液は淋巴球、白血球及單核細胞の増加を來す。而して此際「エオジン」嗜好細胞を伴ふものは豫後良好なりと稱せらる。此現象はランケの第 II 期に於て最も著明にして、更に第 III 期に移行するに細胞数は著しく減少す。ヘルムライビは斯かる細胞の増加を個體「ツベルクリン」に對する「アレルギー」と考へ、第 II 期に於ては「ヒパールアレルギー」、第 III 期に於ては「ヒポアレルギー」の状態なりと稱せり。

15. 臨牀瑣談

田 中 文 男 (岡山醫大)

1. 扁桃腺炎と甲状腺腫
2. 齒齦の腫瘍に就て
3. 癩瘕「ケロイド」に對する「ラヂウム」療法

1. 扁桃腺炎と甲状腺腫

甲状腺腫或はパセドウ氏病が扁桃腺炎に因つて發來することありとし、此際扁桃腺摘出手術を行つて効果を見たりとの報告あり。余は 1 昨年 11 月、當大學柿沼内科にてパセドウ氏病と診斷されたる 38 歳の船員が、度々扁桃腺炎を繰返す爲紹介されて我科に來り、慢性扁桃腺炎のあるを認め、勸めて兩側の口蓋扁桃腺摘出術を行ひ、其効果に就き注意し觀察し居たるに、手術後患者は身體の調子甚だ良好となり、パセドウ氏病と考へられたる症狀は去り、元氣に業務に従事するに至れるを知りたり。但し本患者の甲状腺肥大は比較的輕度のものなりしが故に、パセドウ氏病の症狀輕快が果して如何なる程度扁桃腺摘出によるものなるか判然たらず。然れどもパセドウ氏病患者にして、著明なる扁桃腺炎の所見を有する際には、扁桃腺摘出も一應考慮すべき療法の一たらん。尙、本例に於て注意をひきたるは、手術に際し扁桃腺は非常に大にして且脆くして相當の出血ありたる點にして、手術後該扁桃腺を組織的に検査せしに、特別

の變化を認むる能はざりしも、腺内血管の異常に増殖せるを認めたり。

2. 齒齦の腫瘍に就て

1 年前に右上顎骨の第 1 小臼齒に相當する齒齦部に小豆大の腫瘍を生じ、漸次増大し最近は小指頭大に達し、其腫瘍の内部に、恰も蛸壺の中に蛸の居るが如く 1 つの腫瘍の存在する患者に (35 歳の婦人) 遭遇し、本例は瘻に非ずして「エプリス」ならんとの診斷の下に之を摘出し、全治せしめ得たり。「エプリス」の名稱は、昔より齒齦の腫瘍に總括的に用ひられたるも、最近は齒齦の腫瘍にして、組織的に巨大細胞を有する肉腫様のもののみ使用さるるが至當と考へらるるが如く、而して本例は摘出腫瘍の組織検査により、通例の「エプリス」と異り、齒骨胚胎より出發せるもの如く、演者は之を良性の腫瘍にして、表皮性の齒骨腫ならんと述べたり。

3. 癩瘕「ケロイド」に對する「ラヂウム」療法

乳癭突起炎の手術後、耳後部に癩瘕「ケロイド」を生じ醜形を遺し、之を切除するも容易に再發し治療に窮すことあり。演者は昭和 6 年、シュワルチエ氏手術後に發生したる癩瘕「ケロイド」に對し、局所に「ラヂウム」針 4 本を刺入し、計 3000 mg 時の照射により、綺麗に「ケロイド」の消失せる經驗を有するが、今回又斯かる症例に遭遇し、再び「ラヂウム」針刺入療法を試みたるに俾効を得たりとて、其經驗を報告せり。即ち昭和 8 年に根治手術を行ひたる患者に於ける巨大なる癩瘕「ケロイド」に對し、3718 mg 時「ラヂウム」針の照射を行ひたるに、「ラヂウム」針刺入後最初は局所が柔軟となり腫脹し、少量の分泌物を出すに至るも、漸次「ケロイド」は縮少し、3 箇月にして全く消失するを認めたりとて、演者は之等 3 例の經驗より本法の試用を奨めたり。